

## 大久保智司：藻類学ワークショップ II 「海藻と付着性微細藻（珪藻・藍藻・渦鞭毛藻・ハプト藻・鞭毛虫）の分類と生態」に参加して

本ワークショップは、2008年3月23日から24日にかけて、東京海洋大学水圏科学フィールド研究教育センター館山ステーション（千葉・坂田）で行われました。ワークショップの内容は、海藻に付着する微細藻類についての講義、ステーション周辺の岩場・磯での海藻サンプリング、そして顕微鏡による海藻付着微細藻類の観察と同定でした。

23日の夕方、東京海洋大学品川キャンパスで開催された日本藻類学会第32回大会の全プログラムが終了した直後、ワークショップ参加者を乗せたバスは館山へと向かいました。参加者は講師の先生方を含めて37名です。約3時間の移動の途中には、竹岡にあるヒカリモの発生地に立ち寄り、本でしか知らなかったヒカリモの実物を見ることができました。ステーションに着くとすぐに夕食となり、その後は三々五々ビールを飲みながらの懇親会になりました。この懇親会では、色々な方とお互いの研究についての話ができ、大会とはまた違った非常に良い時間を過ごすことが出来ました。

明けて翌日は、まず付着性藻類についての講義が行われました。講義の内容は付着性微細藻の採取や分離方法に始まり、シアノバクテリア（宮下英明先生）、珪藻（鈴木秀和先生）、渦鞭毛藻（堀口健雄先生）、ハプト藻（河地正伸先生）、単細胞性紅藻（横山亜紀子先生）、鞭毛虫（中山 剛先生）と、それぞれのグループごとに、特に付着性質をもった種の多様性や付着の仕方について、それぞれの専門の先生方がお話をされました。海藻に付着する微細藻が非常に多様であり、同時に興味深い研究対象であると改めて感じました。その後フィールドに出でのサンプリングとなったのですが、この日は朝から雨が降っており、雨合羽に胴長という出で立ちにも関わらずびしょ濡れで寒いという過酷な状況でした（図1）。フィールドに出ると常に強力な雨男パワーを発揮してしまう私のせいだったのかも知れません。参加者の皆様、ご迷惑をおかけしました。とはいえ、海藻の採取自体は有意義なものでした。干潮時のステーションの目の前に広がる岩場の上部にはヒジキが繁茂し、他にも様々な種類の海藻が生えていました。また雨と風の影響か、砂浜にも多くの海藻が漂着しており、全体で20～30種の海藻を集めることが出来ました。バケツいっぱいになった海藻を実験室に持ち帰った後、顕微鏡観察を始めました。藻体の表面をメラミンスポンジでこすったり、藻体を海水に浸してよく振ったりしてはがれ落ちた付着物を顕微鏡下で観察し、どのような種類の微細藻類がい



図2 ワークショップ参加者

るか形態をもとに同定を試みました。海藻の種類によっても違いはありますが、糸状体のシアノバクテリアや中心目珪藻などが観察され、他の参加者の中には渦鞭毛藻などを見つけられた方もいました。また、今回のワークショップのために河地先生が前もって付着性微細藻を培養してくださっており、様々な藻類が増殖している試料も観察できました。全ての日程を終えて帰路に就く頃になると、雨はすっかり上がり頭上には青空が広がっていました（図2）。皆様、申し訳ありませんでした。

ワークショップ終了後、参加者の方々から河地先生に寄せられたアンケートには「普段あまり話をしない研究者とも交流を深めることができ、泊まりがけ企画だったのが大変よかった」、「講義も採集会も私にとっては実りがありました。海藻に付着している藻類がこれほど多様だとは知りませんでした」、「それぞれの藻類を専門で研究なさっている先生の講義が聞けてとても良かったです。培養株を実験で使っている私にとって、フィールドでの採取を行っている学生や先生方に囲まれての採取は、安心してできました」といった意見があり、特に普段フィールドに出られない方や今回初めて付着微細藻類に触れられる方にとって、今回のようなワークショップは非常に有意義であったと思います。しかし、その一方で「内容が豊富すぎて、全体に教科書的になってしまった感がある」、「全体としてちょっと残念なのは時間が足りなくてせわしなかったことです」、「学生実習のように参加者を幾つかの班に分け、各班に講師の先生、ティーチングアシスタントを配置するなどして頂ければもっとスピーディーかつ多くの生物を観察出来たのではないのでしょうか」というような意見も多く寄せられていました。確かに、講義とサンプリング、顕微鏡観察の時間を合わせても実質5時間程度しかなく、じっくりと観察やディスカッションをする余裕はありませんでした。ぜひ次の機会には、このような点を考慮に入れていただき、より素晴らしいワークショップになることを期待します。

最後になりましたが、今回のワークショップの講師をして下さった先生方と、企画・準備・運営に尽力して下さいました国立環境研究所の河地正伸先生、東京海洋大学の田中次郎先生、鈴木秀和先生、藤田大介先生および学生の皆様にご心より感謝申し上げます。

（京都大学大学院 人間・環境学研究科）



図1 海藻サンプリングの様子